

Title	「島の歴史学」講演要旨
Sub Title	History of island : summaries
Author	佐藤, 孝雄(Satō, Takao) 田代, 和生(Tashiro, Kazui) 田村, 愛理(Tamura, Airi) 神崎, 忠昭(Kanzaki, Tadaaki) 山口, 徹(Yamaguchi, Tōru) 近森, 正(Chikamori, Masashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2018
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.88, No.1 (2018. 12) ,p.149(149)- 156(156)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2018年度三田史学会大会講演会報告 : 2018年度三田史学会大会(6月23日)講演会
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20181200-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2018年度三田史学会大会（6月23日）講演会

「島の歴史学」講演要旨

序言 …島の歴史学―講演会の狙い―

講演1 …対馬の古文書―対馬宗家が残した文書と記録―

講演2 …ジェルバ島の漂着聖女信仰―ユダヤ教徒の祭礼を中心として―

講演3 …島の修道院―地中海カンヌ沖レランス島とその修道院―

講演4 …島景観の歴史生態学―ラパ・ヌイと石垣島のジオ・アーケオロジ―

コメント…島が島になる島の歴史

佐藤 孝雄

田代 和生

田村 愛理

神崎 忠昭

山口 徹

近森 正

序言 島の歴史学―講演会の狙い―

佐藤 孝雄

人が暮らす陸域は、もとより島と大陸からなる。一般に島は「四面水に囲まれた小陸地」と定義され、所謂大陸を除く全ての陸域をその範疇に含むとされるが、オーストラリアに次ぐ広大な面積を誇るグリーンランドが島に含められ、大陸とされないことに明確な理由があるわけではない。

もともと、地理的には曖昧・恣意的な区分でも、島という概念自体は、歴史学の重要なツールとなり得るのではなからうか。周囲を水域で画された島は、小島であればあるほど資源も乏しく、他の陸域に依存せずして人の住処となり得ない。それだけに、小島での調査・研究は、人の歴史がそれぞれに個別な事情を抱える他地域・他集団との関係性の中に紡がれることを意識させ、より広範な地域史ひいては世界史に目を向けさせてもくれる。あたかもカメラの被写界深度にも似て、対象地域を狭く絞

り込むことで、周囲との関係性がより鮮明に浮かび上がる。小島にはそうした特性もあるように思える。

そこで、本講演会では、ともするとローカル、マジジナルと位置付けられかねない小島をフィールドにもつ演者に、それぞれの調査・研究成果を紹介いただくことを計画した。日本中近世史、フランス史、イスラム史、考古学の個別・具体的な調査・研究事例に触れるなか、歴史学のツールとしての島の魅力を確認し、「島の歴史学」を考える。

礼文島の事例

礼文島には、少なくとも三五〇〇年以上前から縄文時代人が来島していたことが明らかとなっている。もともと彼らも、その後約二〇〇〇年前に来島した続縄文時代人も、年間を通して島に居住した様子は窺えない。この島での周年居住は、五世紀以降、オホーツク文化集団によって開始され、後世のアイヌにも引き継がれたが、彼らとともに交易民としての性格も帯びた人々であった。それゆえ、この島の歴史は先史以来一貫して他の陸域との分ち難い結びつきの中、紡がれてきたことが窺える。



写真1 日本海北部に位置する礼文島と利尻島

講演1

対馬の古文書

—対馬宗家が残した文書と記録—

田代 和生

長崎県対馬は、九州の北方、玄界灘の海上にある朝鮮半島に最も近い島である。この島の領主宗氏は、十二世紀末、大宰府から派遣された在庁官人惟宗氏が武士化し、対馬の領国支配と朝鮮との通交貿易を独占していく過程で「宗」姓を名乗るようになったといわれている。江戸時代になり、宗家は対馬藩主として「鎖国」時代の日朝外交・貿易を一任されたことから、島の歴史を物語る史料のほとんどが、宗家作成の文書と記録であったといっても過言ではない。

朝鮮半島への要衝の島において類例のない歴史を積み上げてきた対馬宗家の役割を明らかにするため、本報告では以下の三つの視点から検討した。まず第一に対馬旧家の古文書伝領の実態をみるため、『対馬古文書目録』（対馬風土記第十二号別冊、一九七五年）に収録される中世文書伝領家五八家の概要と特徴について触れ、宗氏の朝鮮との関わり、あるいは村方支配の様相について明らかにした。第二に近世の記録類・一紙物からなる『宗

家文書』について、八万点以上の古文書を棚に押し込めた宗家文庫（対馬市厳原町）の内部の状態を紹介し、なぜこのように膨大な史料群が一離島において作成され続けたのか、朝鮮との実務外交と記録保存の関係、記録作成のための戦略といった宗家特有の歴史的背景を探った。第三に近世初期宗家が作成した朝鮮国王の偽造国書について触れ、萬曆十八年（一五九〇）豊臣秀吉宛朝鮮国書が木印「爲政以德」の発見により「偽書」と判断され、さらに料紙・朱肉の科学的調査により断定されるに至った調査成果を紹介した。

講演2 ジェルバ島の漂着聖女信仰

—ユダヤ教徒の祭礼を中心として—

田村 愛理

ジェルバ島は、チュニジア南部のリビア湾に浮かぶ島である。この島では、地中海性気候とアフリカ大陸性気候とが混在し、雨量が少なく地下水の場所が限られているために、島内各地域に多様な生態環境とそれに適応した生活形態が繰り広げられている。島にはスンニー派からイバード派ムスリム（イスラーム最初の分派）、そして最古と称しているユダヤ教徒ディアスポラまでの様々

な宗教共同体が、さらにアラブ、アマジク（ベルベル）といった民族的・出身地域要素によりモザイク状に細分化され、お互いが互いに対してマイノリティであるような、典型的な多元社会が形成されている。

島内の多様な住民の生活環境にはひとつの大きな共通点がある。

ジェルバ島は、地中海世界の覇権を巡る攻防の口中におかれ、幾度も戦乱に見舞われた。そのため人々は、メンゼルと呼ばれる砦様式の屋敷地を核に大家族共同体を中心に暮らしてきた。各メンゼルは互いに排他的で、フランス植民地時代に町が発展するまでは、メンゼルの成員以外の人々が接触するのは定期市と聖者廟への巡礼に限られていた。

本報告では、この島のユダヤ教徒とムスリムがメンゼル境界や岬などで展開している、身元不明の漂泊者が信仰の対象として崇められるという、漂着聖女（エルグ



写真2 ユダヤ教徒のエルグリーバ祭礼にて
(中央がエルグリーバ。この後オークションで集められたスカーフを山のように被せて山車に乗せ、出身地域により二つに分かれているユダヤ教徒共同体を巡行していたが、今はテロに対する用心により大幅に短縮されている。)

リーバ・アラビア語で奇蹟／客人の意) 信仰に焦点をあてた。どの共同体にも属さない漂着者がバラカ(神の恩寵)を起す触媒となり死後に聖者廟が創成され、ユダヤ教やイスラームの普遍的要素と土着的要素が混交した信仰儀礼が生まれ、そこに異なる共同体に属する人々が、癒しや縁結びなど普遍的な願望を希求する境界を超えた共有空間が出現している。このような空間を創出させて

来た島の人々のバラカを希求する力は、紛争の絶え間ない現代社会においても注目に値しよう。

講演3 島の修道院

—地中海カンヌ沖レランス諸島とその修道院—

神崎 忠昭

ヨーロッパの古い修道院には、海に聳えるモン・サン・ミッシェル修道院などのように、島に建てられたものがいくつもある。修道院も維持のために多くの資源を必要とするのに、なぜそのような一見不便な地に建設されたのだろうか。そしてなぜ長期にわたって存続しているのだろうか。本報告は、フランス・カンヌ沖合約2キロにあるレランス諸島とその修道院をとりあげ、古代から中世末期までについて、修道院に関わる文献資料や遺物を検討して、これらの問題を考察することを目的とした。

結論として、(1)島はさまざまな人が行き交う場でもあり、島にあることは孤立だけでなく、周囲との多様な結びつきをもたらすものでもあった。(2)レランス諸島は、海によって動乱から隔てられた平安の地としてローマ帝国末期の貴族たちの避難所であるだけでなく、

海によって結ばれた地として、ガリア本土の司教候補者たちの供給地でもあった。(3)この海域の他の島々にも修道院はあったが、これほど名声を継続したものはない。実際、レランス修道院は八世紀にイスラーム海賊の攻撃を受け放棄されるが、その後十一世紀に再建される。その理由は、レランス修道院は、モン・サン・ミッシェル修道院のように先住民が強く信仰する聖地に建てられたものではなかったが、「聖なる島」「殉教地」としてのレランス諸島とその修道院の記憶が形成され、さらに人々の思いや営為が幾層にもそこに上書きされて、その「イメージ」の上に新たな修道院が再建されたと考えられる。

講演4 「島景観」の歴史生態学

—ラパヌイと石垣島のジオアーケオロジ—

山口 徹

島を取り囲む海洋は障壁ではない。海流が植物の種を運び、風によって海鳥が飛来する。海は島々を孤立させるのではなく、島と島、人と人をつなぐ交通路になる。しかし、人間も含めて陸棲の生物は海洋のただ中で途中下車するわけにはいかない。生命ある限り島の陸地を目

指し、また別の島に渡つてゆく。だからこそ、島にはさまざまなモノやコトや人が凝集する。島景観とは何かと問われれば、ドゥルーズの言葉を借りて、凝集する「多様体」と答えたい。この特性はまさに、自然と人間の絡み合いをテーマとする歴史生態学のフィールドにうつつけである。オセアニアを含む太平洋島嶼では、この絡み合いを、地球科学と考古学を連節するジオアーケオロジーの手法で通時的に解明する研究が進んでいる。たとえばラパヌイ（イースター島）では、十二世紀に人が住み始めて以来、ヤシ科の森林が急速に後退したことが分かっている。人為的に改変された環境のなかで、土壌水分を保ち風害を防ぐ石敷き耕地で、バナナやサツマイモ、サトウキビなど外来の作物が栽培されてきた。太平洋の西端に位置する石垣島でも、台地上の人為的な森林後退に起因して谷戸内の沖積化が十世紀ごろから急速に進行した。東シナ海ではちょうど十四〜十五世紀に交易活動が盛んになり、外来のイネが谷戸の沖積低地で栽培されるようになった。いま見る水田景観が、先史期から続く人と自然の絡み合いの歴史的産物であることを、我われのジオアーケオロジー調査が明らかにしたのである。

コメント 島が島になる島の歴史

近森 正

孤立性、閉鎖性、開放性、狭小性、資源の限定性など島嶼の特性は、観察の仕方、規準のとりかたによつてどのようにも変わる。島は地理的実体であるよりも世界認識のカテゴリーではないか。いかに島が島になるのか。

島は地方（じかた）との関係で生まれる。島に住む人は自分の住むところを島とは云わない。そこは島ではなく、ヘヌアつまり大地、土地なのである。伝承に伝えられるイースター島の最初の渡来者はこの島をテ・ピト・オ・テ・ヘヌア（大地の中心）と名付け、人々はラパヌイ（天の中心に立つ大きな柱）と呼ぶ。人は島に暮らしているのではない。大地に足をつけ、宇宙の軸柱の立つ中心に住まうのである。その島の南西には三つの小さな島、モツが見える。島（モツ）いうのは、地方（じかた）であるヘヌアとの相対的關係のなかで認識されるのである。

一七二二年、復活祭の日にオランダのロッゲフェンによつて発見されたこの島はイースター島と命名された。大航海時代、太平洋の各地ではヨーロッパ人による島の

発見、命名によつて領有権が生じ、植民地化が始まる。

宗主国による領域支配の拡大によつて Island は Islands になり、Poly-nesia (多くの島々) となった。十九世紀はじめロンドン・ミッシヨナリーがタヒチに進出、キリスト教の布教活動によつて伝統文化が破壊されていった。こうして西欧宗主国が優位に立つ「地方」が「島」を領有、支配する関係が成立した。

一七八六年 ラ・ペルースの航海時に作成されたというモアイ巨石像の絵をみると、そこにはモンテーニュ的な古代ギリシャ、ローマへの好みが反映し、ルソー的な「高貴な野蛮人」、シャトーブリアンの「自然人」が描かれている。これが西欧で島の楽園と自然人、裸の女性のイメージをつくり上げた。南海の島に進出したヨーロッパ人は、そこにエクゾテイックな楽園、ユートピアを求める。典型的なエクゾテイズムの例として P・ロティの「ロチの結婚」(Marriage de Loti, 1892) をあげるこゝとができる。ヨーロッパ人にとって支配者はつねに男、被支配者は女。地方は男、島は女という関係ができあがる。ロティを厳しく批判した V・セガレンでさえ、島と女性の身体の美しさを一体化させる。P・ゴーギャンも島の自然人、魅惑的な島の女を描いて、自分と島を対置

させる。

日本もまた島のエクゾテイズム、楽園の対象となった。「お菊さん」や「蝶々夫人」をはじめ、島はつねに魅惑的な女性と結びついている。また、鎌倉の大仏を背景にした人物写真のポーズには、ラ・ペルーズ以来の島に進出した支配者の定型化したスタイルをみる事ができる。(E. Pimman "Central Africa, Japan, Fiji" 1882 年)

二十世紀。ハワイやタヒチを中心にした観光産業、植民地産業が島の自然や文化を商品化しながら楽園の島をつくりだす。島の人も島の幻想を売り物にして商品経済に取り込まれて行く。今日、観光立国によって自立しようとする努力にもかかわらず、人々は自分たちが島に住んでいることをいやが上にも思い知らされる。出稼ぎ労働者として、また教育を受けるために島を離れなければならぬ。地方であるニュージーランド、オーストラリア、商業中心のハワイ、パペーテ、ヌメア、スヴァエなどに移住が続く。それによる人口の流出が各地に過疎化と過密化の不均衡を引き起こしている。

一方で、一九七〇年代以降になると、島と地方の関係を平衡化しようとする動きが生まれたことを見逃すべきでない。フィジーの初代首相カミセセ・マラが提唱する

島の理念：“The Pacific way”（一九八〇年）やサモアの詩人A・ウエントラによる文学活動、「われわれ島人」をスローガンに太平洋の各国で開かれるようになった太平洋芸術祭などを通して島のアイデンティティを求める動きが高まった。共通していることは、ヨーロッパ進出以前の島の歴史を西欧的視点によるのではなく、島の人々の豊かな伝承史を中心にして、民族学、考古学などの成果にもとづいて再構築する試みである。

日本では太平洋戦争期、「大日本帝国は島国の雄大さにおいて、大東亜共栄圏の盟主たるべきである。」（豊島与志雄「島の観念」一九四二）とする主張が島国日本の観念のもとにくりひろげられた。ナショナルリズムにおける地方と島の関係は自己優位の視点を移して、エクゾテイズムのそれを逆転させたに過ぎない。

今日なお、地方と島の関係は平衡がとれているとは云えない。イースター島は森林破壊の、ツバル島は地球温暖化による海面上昇の警告塔としかみられていない。本土と沖縄、沖縄と辺野古の関係は著しく平衡を欠いている。

- 近森 正「ヘヌア・村のある島」『サンゴ礁の景観史』二〇〇八年刊所収
近森 正「ハワイキを求めて」『地球温暖化によってツバルの島は沈むか』『サンゴ礁と人間』二〇二二年刊所収
A・ウエント（近森正訳）「オセアニアと新しい芸術家たち」『アジアと日本』一九八五年刊所収